

ITの普及が 高齢者の交流にもたらすもの

——交流の媒体としての電子メールに着目して——

携帯電話やパソコンといった高度情報通信機器の普及に伴い、他者との交流の姿も変わりつつあることが考えられます。総務省が毎年行っている通信利用動向調査 (http://www.soumu.go.jp/main_content/000016027.pdf) によると、2008年末では、携帯電話所持者のうち54.5%、パソコン所持者のうち49.1%が、電子メールの送受信を行っており、年々増加傾向にあります。他年齢層に比較して低いものの、高齢者層でもこの傾向は認められています。本稿では、高齢者とIT (Information Technology) に関する研究動向をレビューします。続いて、2009年9月に開催された第27回日本都市社会学会 (広島) での口頭発表「中高年のメールを通じた他者との日常的交流」を交え、高齢層及びこれから高齢者の仲間入りをする中年層の、交流媒体としての電子メールの利用状況について検討します。

高齢者とITに関する研究動向

ダイヤ財団がインターネット上で無料公開している社会老年学文献データベース *DiaL* (<http://www.dia.or.jp/dial/>) を用いて、1990年から2008年までに発表された日本の高齢者とITに関する論文を検索しました。タイトル、和文抄録、キーワードに、「IT」「ICT (Information and Communication Technology)」「情報通信」「インターネット」「パソコン」「携帯電話」「メール」のいずれかの単語を含む論文を

検索しました。その結果、641件が選択され、ITに関する論文として35件が選別されました。

選別された論文で、1990年代に発表されたのは、老人保健事業の評価にデータベースとしてのパソコン導入を提唱した1件 (中村ら1990) のみでした。2000年代に入り、テレビ電話による在宅リハビリテーションや、単身高齢者への安否確認サービスなど、ITを在宅での生活支援のツールとして位置づけた論文が発表されるようになります。論文数は年々増加傾向で、2008年には9件が発表されています。これらにおいて検討されているのは、介護者の負担感軽減や、ITを用いたリハビリの効果などで、要介護や虚弱高齢者を想定した論文がほとんどといえます。一般の高齢者を対象とした論文は、他者との交流媒体としてのITに着目したなかで僅かに見られ、電子メールや携帯電話での交流を扱った5件のうち2件が、一般高齢者と子ども (斎藤2006) や友人 (澤岡ら2006) との交流媒体としての利用状況を検討していました。斎藤は、子どもからの金銭的支援よりも、携帯電話や電子メールなどの情報機器と対面での交流が、高齢者の満足度を高めているとしています。澤岡らは、親族や近隣に依存度の少ない高齢者は、友人との交流に携帯電話を利用する傾向があるとしています。いずれも首都圏郊外の一般高齢者を対象とした研究で、日本の高齢者全体の動向としての判断は難しいといえます。しかし、ITの普及は、他者との交流になんらかの影響を及ぼしていることが考えられ、研究の蓄積が必要と考えます。

交流媒体としての 電子メールの利用状況

今回、中高年向けのポータルサイト（ニュースや情報の無料提供サービス）の登録者を対象に、交流媒体としてITの利用状況について調査*を行う機会を得ました。この登録者は、日々の生活で、パソコンや携帯電話を通じてインターネットを活用している人が多いと考えられました。このことから、ITを使えるか否かといった次元ではなく、他者との交流における利用状況を調査したいという本研究の関心とマッチした対象であるといえます。

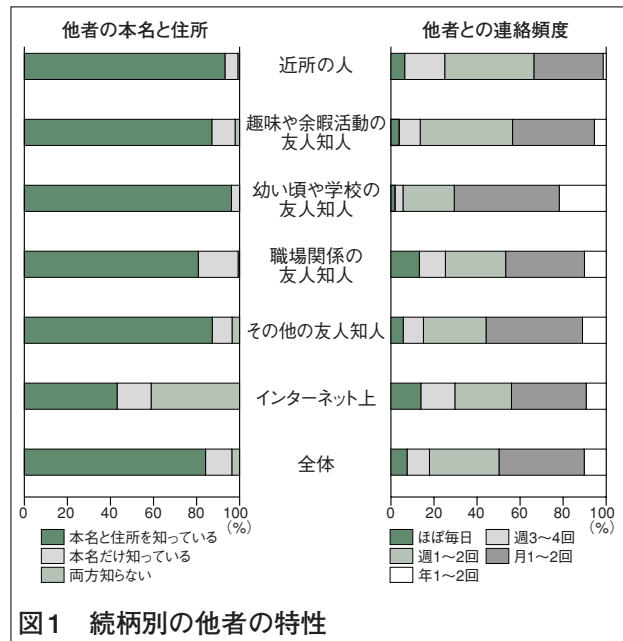
調査は、NECビッグロブが運営しているポータルサイト「BIGLOBE Station50」で協力者を募り、パソコン画面上で回答を個別記入してもらいました。2009年4月9日～23日の期間に回答が得られたのは3,310人でした。回答者の71.9%が男性で、44.9%が大学・大学院卒、38.9%が定年退職や主婦を含む無職でした。年齢は50歳台53.6%、60歳台35.2%、70歳以上11.2%、男性より女性で年齢の若い傾向が認められました。

回答者には、「昨日までの1週間で、パソコンや携帯電話を使ってメールを送信した方の中から、家族・親族以外で思い浮かぶ他者5名」について尋ねました。この手続きにより、2,177人の回答者から6,972人の他者との交流についての情報を得ました。

一人の回答者が挙げた他者の数は0～5名で、平均は3.2名でした。送信した他者がいないと回答した人は34.2%、女性の回答者で24.6%、男性の回答者で37.9%と、女性より男性で高い割合を示しました。メールを送信した他者のいない回答者は、60歳以上、小学校・中学校卒業程度、無職で高い割合を示しました。本調査結果から得られた基礎的知見を、以下に述べたいと思います。

電子メールを発信した他者の特性

回答者が挙げた他者の続柄は、多い順に、職場関係



の友人知人に趣味や余暇活動の友人知人でした。男性の回答者では、職場を通じて出会った友人知人、これに次いで趣味や余暇活動を通じて出会った友人知人が続いていました。女性の回答者では、趣味や余暇活動を通じて出会った友人知人、これに次いでその他の友人知人が続いていました。数は少ないですが、コミュニティサイトを通じたインターネット上の知り合いとして挙げられた他者が存在しました。また、これらの他者の本名と住んでいる場所を知っているかを尋ねた結果、84.2%の他者の本名（インターネット上での呼び名は除く）も住所も知っており、この割合は男性の回答者が挙げた他者よりも、女性の回答者が挙げた他者で高い割合を示しました。

電子メールを送信した家族・親族外の他者との、電子メールも含めたふだんの連絡方法を尋ねました。この結果、他者の65.0%がふだん直接に回答者と会っていました。また日常的に回答者とメールをやりとりする他者の割合は、携帯電話からのメールでは女性の回答者が挙げた他者で、パソコンからのメールでは男性の回答者が挙げた他者で顕著に高いことがわかりました。

本名と住んでいる場所の認知について他者の続柄別に見ると、職場関係の友人知人として挙げられた他者は、本名だけ知っている割合が比較的高いことがわか

ります。これらの他者との連絡頻度を見ると、幼馴染や学校時代の友人知人として挙げられた他者との連絡頻度は少なく、近所の人や趣味や余暇活動の友人知人に比較して直接会うことが少なく、固定電話での通話、手紙のやりとりが多い傾向が見て取れました。これは、幼馴染や学校時代の友人知人は遠方に住んでいることが予測され、年賀状や同窓会といった交流に限られていることが考えられます。交流頻度が比較的に多い他者として、近所の人と職場関係の友人知人が挙げられました。近所の人とは、距離の近接性から、直接に会うことが多く、パソコンでのメールが極端に少ない傾向が見られました。(13ページ図1)

電子メールを送信した他者との日ごろのお付き合い

回答者が挙げた他者との日ごろのお付き合いの程度について見てみると、「お茶や食事を一緒にする」「趣味や余暇を共にする」が多く、「病気の時に助けあう」といったサポートの提供は僅かでした。

職場関係の友人知人との間では、仕事上の付き合いにとどまっていることが多く、お茶や食事を一緒にすることも多いようですが、これも仕事上の延長であることが想像されます。趣味や余暇活動を通じての友人知人との間では、「趣味や余暇を共にする」が66.6%、「お茶や食事を一緒にする」が47.3%と多く見られましたが、「相談をする」ことは少なく17.9%でした。幼い頃や学校時代からの友人知人との間では、「お茶や食事を一緒にする」が68.6%、「趣味や余暇を共にする」が42.7%に加え、「相談をする」が33.5%と他の続柄の他者と比較して多く見られました。近所の人との間は、「立ち話や挨拶程度」が29.8%と、他の続柄の他者に比べて多く見られ、また、近所に住んでいるという近接性から、「物をあげたりもらったり」が33.1%と比較的多く行われていました。(図2)

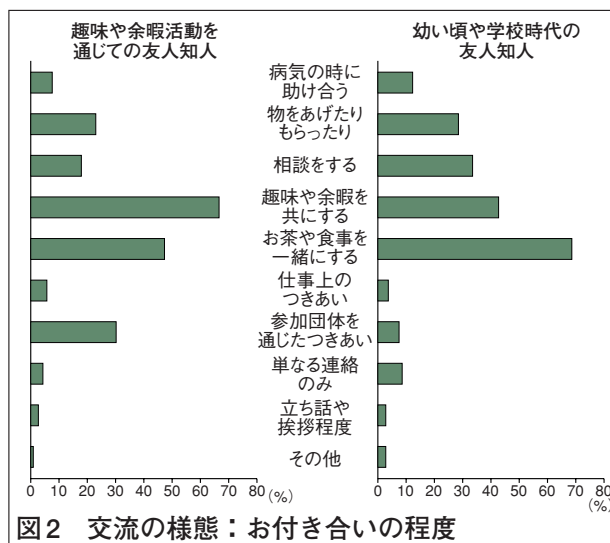


図2 交流の様態：お付き合いの程度

まとめ

インターネットを使う中高年の多くは、親族外の他者と電子メールを通じた交流を有し、メールを対面接触の補助的な交流媒体として位置付けていることが示されました。また、これらの他者の多くとは、日ごろ、お茶や食事を一緒にするや趣味や余暇を共にする程度のお付き合いで、相談したり、病気の時に助け合うなどは、幼い頃や学校時代からの友人知人との間に限定されていることがわかりました。

職場や日々の生活でITに関わる経験を有した中年層が高齢化していく中で、ITを交流媒体と位置づけ、他者との交流の実体を正確に捉えることは重要な課題といえます。今後は、電子メールを通じた交流が高齢期のQOL (Quality of Life) に及ぼす影響、その他の交流媒体との比較などを行っていきたいと考えます。

(主任研究員 澤岡詩野)

*本調査は、2008年度大川情報通信基金研究助成金(研究代表:袖井孝子)の助成により実施しました。

引用文献

- ・中村好一(1990)老人保健事業の評価:老人保健事業評価図の提唱,日本公衆衛生雑誌,32(2),73-81.
- ・斎藤嘉孝(2006)高齢者の親子コミュニケーションと情報機器,日本在宅ケア学会誌,10(1),48-55.
- ・澤岡詩野,福尾健司,浜田知久馬(2006)都市高齢者のネットワークタイプによる友人との交流媒体としての携帯電話の利用状況.老年社会科学,28(1),12-20.